

JSOA2026 開催のご挨拶

JSOA2026 会長／大阪保健医療大学 中村 憲正



この度、日本スポーツ整形外科学会 2026 を 2026 年 8 月 27 日から 29 日まで、札幌コンベンションセンターで開催いたします。本学会は、2023 年に日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) と日本整形外科学会 (JOSSM) の合併により新たに設立され、2026 年の本会が第 4 回目の開催となります。前身の両学会が築き上げた文化を継承、融合させ、我が国におけるスポーツ整形外科を扱う随一の学会として発展させる所存です。また本学術集會を、国際水準の学術フォーラムとして成功させるべく大阪保健医療大学、大阪大学整形外科学教室および同門会にお力添えを頂き、準備を行って参ります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

今回の学会のテーマは「情熱×科学-スポーツ整形の未来を拓く-」と致しました。スポーツ整形外科学の発展には基礎・臨床両面での科学的エビデンスの蓄積が欠かせません。しかし、例えば治療上のブレークスルーを達成するなど学術領域のパラダイムシフトを起こすには同じ研究領域に参画する多くの臨床家・研究者の個々の情熱が一つのベクトルに収束され、拡大していくことが重要と感じています。かつて膝前十字靭帯再建術の確立に向けて日本の諸先輩方が世界的貢献をなされました。その当時の学会、セッションを振り返りますと、臨床、基礎研究を問わず多くの白熱した議論が飛び交い、大変なエネルギーを感じたことが思い出されます。こう

した熱量を学会に再び持ち込み、次世代の先生方に夢を持って研究に取り組んでもらうにはどうすればよいか？ これを本学術集會のテーマとし、プログラムの作成に着手いたしました。

具体的には、世界から現在のスポーツ整形外科のオピニオンリーダーを数多くお招きし、先端の知見のアップデートを御講演頂くのみならず、日本の若手の先生方と積極的に議論の輪に加わっていただけるようシンポジウム、さらにはテーブルを囲んでの症例検討などを企画しております。海外ゲストと直接交流し議論することが良い刺激となり、多くの若手の先生が今後の国際的な研究への情熱を高めていただくきっかけとなればと考えます。

本学会の発展には会員の皆様、特に今後の研究・臨床を牽引していただく若い先生方の科学への情熱に委ねられています。多くの先生方のご参加により本学術集會が充実した成果を生むことができますよう何卒宜しくご協力のほどをお願い申し上げます。

本学術集會は 8 月の最終週の週末に札幌で開催されます。夏の終わりに涼しく過ごしやすい札幌で、学会のみならず、北海道の素晴らしい豊かな自然、そして大変魅力的な海の幸、山の幸を楽しまれてはいかがでしょうか？ 皆様のお越しを心よりお待ちしております。

会告

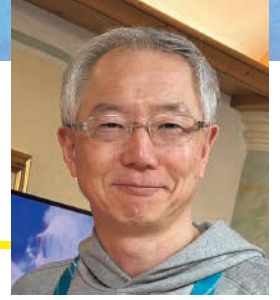
- 会期 2026年8月27日(木)～29日(土)
- 会長 中村 憲正 (大阪保健医療大学 教授)
- テーマ 情熱×科学-スポーツ整形の未来を拓く-
- 会場 札幌コンベンションセンター
- 学会 Web サイト <https://www.congre.co.jp/jsoa2026/>

学会ホームページは
こちらから



ミラノ・コルティナ 2026 冬季オリンピック帯同

日本選手団本部ドクター／札幌医科大学 渡邊 耕太



本大会は2026年2月6日から22日までの17日間にわたり開催されました。筆者は日本選手団本部ドクターとして5回目の帯同となりました。今大会の特徴の一つは、ミラノとその北の山岳地帯という広域での開催となったことです。選手村は7地域に分かれ、日本に置き換えて開催地域をイメージすると、東京から見て新幹線のない長野、山形、福島各市のような位置関係になります。私が滞在したリビーニョ選手村はミラノからバスで4時間30分ほどの所にあり、スイスの国境にも近いアルプスの山の中でした。標高1800m、人口6800人の町で、四方を囲む山々にはスキー場がありそのコースをすべて合わせると100kmを超えるそうです。ここはスノーボードやフリースタイルスキーの会場でした(写真1)。

本部メディカルスタッフは5名で、整形外科医2名(福田直子、渡邊)、内科医2名(土肥美智子、福嶋一剛)、トレーナー1名(堀田泰史)の構成でした(写真2)。それに加えて各競技団体が医師やトレーナーを派遣しました。リビーニョでは全日本スキー連盟派遣の整形外科医(藤巻良昌)とも一緒に仕事をしました。選手村外にはハイパフォーマンススポーツセンターのサポートハウスが設置され、そこからトレーナーなどのスタッフ(井野拓実など)も選手村内に派

遣されました。

リビーニョでは事前の予想通り、最も多くの外傷が発生しました。ポリクリニックへの救急搬送が3件発生し、そのうちの1件では残念ながら競技出場ができませんでした。選手はもちろんのこと、コーチやスタッフ、そして我々にとってまさに苦渋の決断でした。しかし本番までの数日間、競技出場を目指して一生懸命努力しました。特にトレーナーの尽力には頭が下がるとともに、外傷後経過の常識を覆すような回復を見せたそのスキルにも敬服する思いでした(写真3)。

近年のSNSの広がりによって選手へ方々から応援がある一方、心無い中傷も少なからずあります。2024年のパリ夏季オリンピックから、本格的に日本オリンピック委員会による誹謗中傷対策がなされています。さらに、ウェルフェアオフィサーが選手団に配置され、選手のメンタルケアにも配慮されています。レースをキャンセルせざるを得なかった選手などに対する誹謗中傷についても、対応していただきました。

期間中は多くの印象深い選手達に出会えました。入村前にケガをしてしまった選手の驚異的な回復、初出場から8年でとうとう金メダルを獲得した選手の人間の成長、金メダルを目指し競技力だけではなく周囲から応援されるような人物になるべく努力する選手など。今大会では史上最多の24個のメダルを獲得してくれました。フィギュアスケートペア“りくりゅう”の大逆転金メダル、スピードスケート高木美帆選手の個人史上最多10個のメダル獲得、スキージャンプ団体の北京大会からのリベンジメダル獲得など。その中でリビーニョが最もメダル数も多く、大変盛り上がったオリンピックとなりました。またトレーナーのケア・コンディショニング総数は160件を超え、これも史上最多かと思えます。この場をお借りして、共に戦った仲間たちに感謝申し上げます。



写真1 街から見た競技会場(夜) 左のライトアップされたハーフパイプの左隣にはクロスのコース、右隣にはスロープスタイルコース、右はビッグエア。



写真2 本部メディカルスタッフ 左から堀田、福嶋、福田、土肥、渡邊(敬称略)



写真3 トレーナーのケア・コンディショニングの様子 選手のケアの横で、病態に合わせたテーピング法について検討が行われていた。

女子アイスホッケー日本代表チーム チームドクター／ 医療法人社団山手クリニック 服部 幹彦



この度、女子アイスホッケー日本代表チームドクターとして、2026年ミラノ・コルチナ冬季オリンピック帯同しましたので報告させていただきます。2009年から代表チームチームドクターとなりました。ソチオリンピック、平昌オリンピック、北京オリンピックに帯同し、世界ランキングも帯同当初12位より6位まで上がりました。今回で17年間担当したチームドクターですが、これが最後の女子アイスホッケーの代表活動となりました。

チーム構成としては、選手23名、監督、コーチ3名、チームリーダー1名、トレーナー2名、イクイプメント1名、MG1名、チームドクターの計32名となります。帯同期間は2026年1月31日から2月15日でした。

1月31日羽田空港から約16時間の飛行時間でイタリア、マリペンサ空港に到着した。アイスホッケーチームが滞在するミラノ選手村は空港からシャトルバスに1時間程度で到着しました。

ダイニングはイタリア料理がベースで、肉類各種、野菜、乳製品が豊富でした。ドーピングコントロールについては、18名の選手が



女子アイスホッケー日本代表チーム

血液検査及び尿検査12選手、尿検査のみ6選手がドーピング検査をうけました。選手村のポリクリニック（診療所）は、レントゲンから1.5テスラのMRIまで完備されていた。競技会場のアイスホッケーリンクでは、メディカルミーティングと氷上EAP（Emergency action plan）講習会が行われた。リンクには歯科治療施設、整形外科用治療施設が配備され安全管理上優れた施設であった。

フィンランドチームのノロウイルス感染が発生し、試合延期となった。ノロウイルスは平昌オリンピックの際にも流行したもので、その経験により、選手スタッフに感染予防対策を徹底して行った。

2月6日から10日まで予選リーグが行われ、フランス、イタリア、ドイツ、スウェーデン戦が行われ、フランスには勝利したものの、日本は予選敗退となってしまった。内情としては、試合会場リンクが国際規格より2m小さく、審判も近年のヨーロッパリーグの傾向から女子もコンタクトを反則にしない傾向があり、日本の強みのスピードが活かせなく、圧倒的に小柄な日本チームには大変厳しい状況でした。

2月15日 当初よりも早い帰国でありましたが、3月に開催されるWORLD BASEBALL CLASSIC (WBC) 2026 TOKYOのメディカルディレクターとして東京ラウンドのEAPの準備もあり予定より早く帰国しました。WBCでは、入国前各チームの医療機器、医薬品申請、東京ラウンドでのEAPの策定、医療連携を怪我が発生した際の救急対応を行いました。

今回で17年間女子アイスホッケー代表チームチームドクターをさせていただきました。開業して12年間、毎年長期でクリニックを不在にしながらも代表活動できましたのも勤務頂いている先生方のおかげですが、開業しても現場活動はできるものと考えます。スポーツの現場活動は、医療的な判断だけでなく、連盟、チームスタッフ、所属チームなど多くの関係があり、医療機関との判断基準が異なります。今後、スポーツの現場活動を行う先生方への支援ができればと考えています。



ミラノ・マルペンサ空港到着時、左より、筆者、JOC本部ドクター 福田直子先生（三井記念病院整形外科）、渡邊耕太先生（札幌医科大学医学部スポーツ医学講座）、全日本スキー連盟・藤巻良昌先生（昭和大学医科大学整形外科）とこれから分村になるので、それぞれの健闘を祈って写真を撮りました。



アイスホッケー会場には、整形外科手術室、歯科治療室、自動CPR装置まで準備されていました。



WBCにおいて、グラウンド上での救急カート

Traveling Fellow 報告記

2025 KOSSM

岡山大学 岡崎 勇樹 (左)
東北医科薬科大学 千葉 大輔 (右)



JSOA-KOSSM Traveling Fellowとして、2025年9月14日から28日までの2週間、韓国のソウル、釜山、大邱(テグ)、大田(テジョン)を訪問しました。日本ではなかなか経験できない関節鏡視下半月板・軟骨同種移植術に加え、人工膝関節置換術や膝関節周囲骨切り術を中心に見学する貴重な機会を頂きました。いずれの施設においても韓国の整形外科医の先生方の手術技術は卓越しており、深い感銘を受けました。さらに手術見学に加えカダバーワークショップにも参加する機会を得て、帰国後の臨床に繋がる有益な知識を得ることができました。

KOSSM Meeting (9月20日)では、岡崎が「内側半月板後根断裂の5年フォローアップにおける臨床成績」について、千葉が「前十字靭帯損傷に合併する外側半月板縫合術後のMRIにおける信号変化とpivot-shift現象の関連」について発表しました。訪問各地で開催して頂いた懇親会を通じて、日韓の交流関係の緊密さと韓国の先生方の日本に対する深い敬意を実感いたし

ました。さらにCity tourではソウル国立博物館の見学やプロバスケットボール観戦、サウナ体験、非武装地帯観光など、いづれも貴重な経験となりました。今後、日本と韓国の整形外科医がより良好な関係を築いていけるよう、微力ながら尽力していく所存です。最後に本Fellowshipへの参加にあたりご推薦いただいた先生方、ならびに長期間の不在にもかかわらず快く送り出してくださった岡山大学・東北医科薬科大学整形外科教室の医局員の皆様に、心より感謝申し上げます。



左上：Dr. Du Han KimとLions球場にて
右上：Lions球場ドクター控え席(砂かぶり席)にて

左下：釜山の夜景を背景に
右下：Dr. Jin Goo Kimと



左上：ソウル大学病院にて
右上：Dr. Kyung Taek KimとDr. Seung Suk Seoと

左下：Dr. Du Han KimよりCertificate授与
右下：KOSSM会場にてDr. Sung Hyun Leeと

編集委員会

担当理事／東京大学 **武富 修治** (左)
委員長／札幌医科大学 **渡邊 耕太** (中)
副委員長／高知大学 **池内 昌彦** (右)



編集委員会の紹介をさせていただきたいと思います。編集委員会は委員長の渡邊耕太先生、副委員長の池内昌彦先生を中心に、梶田幸宏先生、橘優太先生、辰村正紀先生、中佐智幸先生、中瀬順介先生、野崎正浩先生、橋本祐介先生、半谷美夏先生、古島弘三先生、松浦哲也先生、山神良太先生に委員をお務めいただいております。

主な仕事の1つは日本スポーツ整形外科学会誌の発刊です。学会誌は年3刊発刊しています。学会誌の査読の際の主査を編集委員が務め、査読者を選定し、査読後の判定を行います。原著論文、発表論文の2つの形式を受け付けていますので、学術集会で発表した研究を積極的に学会誌にご投稿いただければと思います。質の高い論文を英語論文として投稿する際には、Asia-Pacific Knee, Arthroscopy and Sports Medicine Society (APKASS)、JSOAとKorean Arthroscopy Society (KAS)のオフィシャル英文ジャーナルであるThe Asia-Pacific Journal of Sports Medicine, Arthroscopy, Rehabilitation and Technology (AP-SMART) (2024 impact factor : 1.4)への投稿を検討いただければ

と思います。また、当該年に発行された学会誌に掲載される原著論文の中から、本学会の発展につながる学術的に質の高い論文の輩出を増やすことを目的とし、和文論文賞を審査しています。最優秀論文賞1編以内および40歳以下の若手を筆頭著者とする論文から若手症例論文賞2編以内を審査選定し、理事会に上申しています。

JSOAは2023年に日本のスポーツ整形外科分野の学会の再編として、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)の一部と日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)が合併し、誕生しました。新たに日本のスポーツ整形外科の学会が1つにまとまったことを契機に現在JSOAでは、スポーツ整形外科の教科書を作成中です。本教科書は編集委員会でコンセプトや目次、執筆者などを検討し、JSOAの代議員を中心として各分野のエキスパートの方に執筆をお願いし、南江堂から発刊される予定です。今年の学術集会での発刊に向けて作業中ではありますが、代議員、会員の皆様には執筆・校正などご協力いただき、感謝申し上げます。引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

レジストリ委員会

新たな JSOA レジストリの構築と運用について

担当理事／宮崎大学 田島 卓也 (左)
委員長／山形大学 鈴木 朱美 (右)



日本で開発された関節鏡は世界中に普及・発展し、多くの症例で活用されている。日本スポーツ整形外科学会 (JSOA) では前身の1つである日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) で構築されたレジストリ (JOSKAS e-NOTE) を踏襲し、かつ2020年4月より開始された日本整形外科学会症例レジストリ (JOANR) 2階部分に関節鏡レジストリを設置し、運用してきた。2023年6月にJOSKASと日本整形外科学会スポーツ医学会 (JOSSM) が発展統合する形で再編されるに伴い、JSOAとしての関節鏡・スポーツ整形外科手術のレジストリを構築することになった。2023年8月にJSOA将来構想委員会より独立する形でJSOAレジストリ委員会が発足し、新たなレジストリを構築すべく準備を進めてきた。脊椎・肩・肘・股・膝・足分野の担当者各2名およびアドバイザーとして前達雄先生、中前敦雄先生を加えた委員会を構成し、協議を重ねてきた。すでに個別のレジストリを運用している日本股関節学会・日本脊椎脊髄病学会などの学会等とも協議し、術者・入力者に負担の少ない方法を模索した。さらにJOANR側とも月に1階の定期ミーティングを重ねて、JOANRの運用ルールに従う形で新たなJSOA

レジストリを作成した。2025年4月1日より新たなレジストリが運用開始になり、これまで1年間のデータを蓄積してきた。この1年で入力方法に関する数件の質問等はあったが、運用開始後の大きなトラブルは見られていない。今後は新レジストリの内容、使い勝手、運用方法について、学会員の皆様にアンケートの実施、もしくはパブリックコメントを募集し、より良いレジストリになるように進めていく予定である。なお、2021-2023年度のJOANR 2階部分に蓄積した膝関節に関するデータを解析して、本邦の膝関節鏡手術の現状を報告したのでご参照ください。学会員の皆様に有効に利用していただけるレジストリになることを祈念し、収集したデータを基にJSOAの存在意義を示していきたい。

Tajima T, Suzuki A, Nakamae A, et al.. Trends in arthroscopic meniscus and anterior cruciate ligament surgery in Japan : Review of a 3-year registry of the Japan Sports Orthopaedic Association. J Orthop Sci. 2026 Mar 31 : S0949-2658



論文へのアクセスは
こちらから

編集後記



JSOA ニュースレター第6号をお届けいたします。今号も本学会の活発な活動を象徴する、極めて密度の高い内容となりました。

巻頭では、本年8月に札幌で開催される「JSOA2026」の中村憲正会長より、大会テーマである「情熱×科学」に込められた熱いメッセージをいただきました。また、今号の大きな見どころは、2026年2月に開催されたミラノ・コルティナ冬季オリンピックの帯同報告です。日本選手団本部ドクターを務められた渡邊耕太先生、そして女子アイスホッケーチームを17年間にわたり支え続け、今回が最後の代表活動となった服部幹彦先生には、現場の緊迫感や感動が伝わる貴重な手記をお寄せいただきました。

さらに、日韓の学术交流の懸け橋となったKOSSM Traveling Fellow 報告記では、岡崎勇樹先生と千葉大輔先生が韓国で得た知見や交流の様子を瑞々しく綴ってくださいました。編集・レジストリ両委員会の紹介記事を含め、ご多忙の中、珠玉の原稿をご執筆いただいた先生方に深く御礼申し上げます。

事務局や広報委員の皆様のご尽力により、ミラノ五輪の集合写真をはじめとする豊富なビジュアルを活かした、視覚的にも楽しめる誌面となりました。本ニュースレターが、会員諸兄弟の日常診療や研究における新たな「情熱」の着火剤となれば幸いです。

中川 幸洋
和歌山県立医科大学紀北分院



今後の学術集会

schedule

日本スポーツ整形外科学会 2027 (JSOA2027)

会期 2027年6月17日(木)~18日(金)
会場 札幌コンベンションセンター
会長 佐藤 和毅 (慶應義塾大学 教授)
テーマ 「守・破・離」先人に学びつつ、探究心を持ってさらなる高みを目指す。

これから開催される学術集会の情報は、学会ホームページに随時更新中



【学会からのお知らせ】

会員の皆様への利便性を挙げることを目的としまして今年度より、会費のお支払い方法が、クレジット決済または、銀行振込となります。メールで会員の皆様には詳細をご案内しておりますが、ご不明な点がございましたら、事務局へお問い合わせください。